

# 町内会活動の新たな形について

## ～津山市北園町の全数調査を基に～

The state of the neighborhood association activity : Based on a complete count survey in Kitazonocho, Tsuyama-shi.

日本では、高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により地域コミュニティの衰退が進み、地域のつながりや地域活動に対して大きな影響を及ぼしている。そのため、現在、日本各地の町内会において、少子高齢化、過疎化、ドーナツ化現象などの影響を受け、その活動が停滞や減少している事例が多くみられる。津山市においても例外ではない。そこで、美作大学が立地する津山市北園町で町内会活動に関する全数調査を行い、全国各地の町内会活動に関する調査と比較することによって、新たな町内会活動の形を考察する。そして、実際にアクションリサーチ<sup>1)</sup>の手法を基に、新たな形の町内会活動を試行する。

有岡 道博<sup>1) †</sup>

キーワード 町内会 共助 地域活動 大学生 アクションリサーチ

### 1. はじめに

少子高齢化、過疎化が進むなど変容する社会により地域コミュニティの衰退は進んでいる。その中で地域活動の基盤である町内会もまた課題を抱えている。

京都新聞デジタル版（2020. 9. 11）によると、「国勢調査は町内会の仕事か？調査員の確保丸投げ過ぎる」と題し、京都市での国勢調査に際して、町内会の担い手不足が深刻化している事実が浮かび上がったことを報道している。調査員のなり手がなく、役員が仕方なく行っており、その負担感から任期が終わるとともに退会を決めている役員も多い<sup>[1]</sup>。

また、中田によると、『いま地域がどうなっているかの情報もなく、直接関係のあること以外はなるべく関わりたくないし関わる余裕もない、という住民生活の姿があります。そしてそのために、こうした住民で組織される町内会・自治会は、組織への加入率の低下や役員のなり手がいないという、組織存続の条件を欠く事態に追い込まれようとしています。』<sup>[2]</sup>としている<sup>[2]</sup>。

地方自治法第 260 条の 2 によると、『町内会は、町又は字の区域その他市町村内の一定の区域に住所を有する者の地縁に基

づいて形成された任意団体であり、町または区域の住民相互の連絡、環境の整備、集会施設の維持管理など、良好な地域社会の維持及び形成に資する地域的な共同活動を行う』と定義されている。総務省によると、2013（平成20）年4月1日現在で全国に29万8700の自治会・町内会がある。

1968（昭和43）年に内閣府が行った「住民自治組織に関する世論調査」では、町内会等への加入率は都市部で88.7%、町村部では90.5%であったが<sup>[3]</sup>、およそ半世紀後の2010（平成17）年の「国民生活選好度調査」では、全体で73.0%まで低下している。町内会には、①加入率の低下、②構成員の高齢化、③担い手不足、④住民の連帯感の希薄化、⑤行事などの共同作業が困難などの課題があるとされる<sup>[4]</sup>。

しかし、2011（平成23）年の東日本大震災において、町内会が互助組織として機能したこともあり、災害に対する町内会の役割は再認識され、地域防災活動の中核機関として期待が高まっている。

組織は弱体化するのに、災害時の対応や高齢者の見守りなど、期待される役割は大きくなる一方である。

1) 美作大学生生活科学部社会福祉学科

北園町町内会でも以前は、老人会、子ども会等の行事も含め多くの行事や地域のお祭り、運動会などを開催し活発に活動していた。しかし、現在は納涼祭などの行事もほとんどなくなり、登校時の見守りさえも実施されていない。また、住民に大学生や独身のサラリーマンなども多く、なるべく関わりたくないという住民が増えている。そのため、町内会への加入率の低下や役員のなり手がいないという担い手不足が発生し、町内会活動の継続性を脅かす事態に追い込まれようとしている。

そこで、町内の全世帯に調査を行い、大学がある町内会という特性を踏まえた上で、町内会活動の持続・活性化に何が必要か、何が大切かを考えていくこととした。

## 2. 先行研究から

先行研究には、大学などの研究者によるものと国や自治体によるものの2つの流れがある

### 1) 大学などの研究者によるもの

先行研究を見ると、町内会は、1940(昭和15)年の「部落会町内整備要領」(内務省訓令第17号)で自治体の下部組織として定義され、その印象を現在まで保っている。しかし、実際は相互扶助の自治組織に過ぎない。現在、世帯単位で組織されてきた町内会は、高齢化や世帯の縮小などの社会の構造変化に対応して、十分機能することができなくなっている。そのため、これまでの定型的な活動を見直し、住民の個性に応じた柔軟で多様な活動を行うことが期待されるようになってきた。

中田は、町内会の基本的性格を以下のように定義している。

①一定の区域を持ち、その区域が相互に重なり合わない

②世帯を単位として構成される

③原則として全世帯加入の考えに立つ

④地域の諸課題に包括的に関与する

⑤それらの結果として、行政や外部の第三者に対して地域を代表する組織となる<sup>[5]</sup>

そして中田による町内会運営の課題は、①組織のマネージメントの刷新、②役員人事と任期、③財政運営、④「地縁による団体」の法人化等である。そして最後に、住民が出会う場を作り、お互いのつながりを深めることこそ住民自治の基盤であり、町内会の進むべき方向であるとしている<sup>[6]</sup>。

また、大学生と町内会の関係を研究したものは限られるが、清水らや竹本の研究を概観すると以下のようになる<sup>[7][8]</sup>。

どちらも大学生が下宿している地域に対する調査で

あるが、全住民を対象としたものではない。学生と町内会長、学生と区役所への来訪者への調査となっている。学生が町内会の一員として活躍するための課題を明らかにすることを目的としている。

結果としては、住民も学生もお互いに関心を持っており、町内会の活動に参加することを望ましいとしている。しかしながらお互いのことを理解していないところがあり、意識の差は広がっている。お互いが一歩踏み出そうとしないため、平行線のまま推移していることが明らかになった。

課題解決の方法としては、学生の町内会への加入促進、大学から学生への社会生活の指導が挙げられている。

### 2) 国や自治体によるもの

国の調査・研究としては、主に総務省を中心とした報告書があり、地方自治体には全国の様々な自治体による町内会の実態調査報告書がある。サイニーなどには載ってなく、それぞれの自治体のホームページに掲載してあることがほとんどで、調査報告書の様式が多く、結果の報告に終わっているものも多い。

拙稿では岡山市をはじめとする12の地方自治体の調査報告書を参考とした<sup>[9][10][11][12][13][14][15][16][17][18][19][20]</sup>。調査対象者が単独の町内会の住民のみというものはなく、市内の町内会長や市民から抽出した集団に対してのものがほとんどである。町内会が抱える課題の抽出を目的として、住民による課題解決の提案を収集している。

それらの内容をまとめると以下ようになる。町内会の役割は、①地域の安全(防犯・防災・交通)、②ごみ収集場所の管理、③お祭り・行事の開催、④子ども会や老人会の活動支援などに集約され、行政の下請けというイメージが強い。課題としては、①加入率の減少による会員の減少、②高齢化と世帯の縮小による活動の困難さ、③役員の負担の増加したことによる担い手(役員)不足、④行政からの依頼の多さが上がっていた。課題解決の方法としては、①役員の負担を減らす、②わかりやすい情報発信、③運営の見直し、④住民が求めるサービスの把握と実施、⑤行政の協力(設備・財政・人材育成)等が提示された。

現状をまとめると、高齢化率40%、世帯数30世帯で町内会を解散した事例も見られ、少子高齢化の環境の中で町内会の運営に困難を感じているところは多い。そのため、ボランティアやNPOの地域運営組織<sup>2)</sup>に期待するところが大きくなっている。

### 3. 目的

北園町の住民にアンケート調査をすることにより、町内会活動の課題を明らかにする。また、他地域の町内会活動の調査と比較し、課題解決の方法を提案する。そして、その提案に沿った活動をアクションリサーチの手法を基に試行する。

### 4. 方法

#### 1) アンケート調査

①研究方法 量的全数（悉皆）調査（自計式配票調査）

期間 2019（令和1）年7月8日～16日

対象 北園町内の全世帯 604世帯

（平成27年度国勢調査）

回収率 配布数 414世帯

（訪問時不在者や拒否者がいたため）

有効回答数 270世帯（65.2%）

②調査内容

町内会長にヒアリングを行い、町内会の意向も踏まえて以下の内容を中心に質問票を作成した。

- 町内会運営に問題があるとすれば
- 市役所と町内会の在り方について
- 加入・脱会に関すること
- 役員のなり手不足、高齢化社会、若者の無関心下での町内会活動活性化の方策

③倫理的配慮

社会福祉士会の倫理綱領に基づき個人情報に配慮することを確認したうえで研究を開始した。調査については、訪問時文書を提示し口頭で説明したうえで、参加の意思確認を行った。資料については、対象者が特定できないようIDを使用し、検討終了後手順ののっとり破棄することとした。

#### 2) アクションリサーチ

①研究方法 アクションリサーチ（関与観察法）

日時 2020（令和2）年5月3日～10月8日

対象 北園町内の住民（子育て中の親子）

②調査内容

- 町内会役員からの聞き取り
- 活動計画の立案（町内会役員とともに）
- 活動内容

・みんなの畑

町内会の管理する河川公園の一部を開墾し、畑地とした。

野菜を栽培した。（1a程度）

・みんなの田んぼ

町内の市街地の中に町内会の仲介で畑を借り、水田に作り替えて水稻を栽培した。（7a程度）

・畑だより

活動を全世帯に広報するため広報誌を作成配布する。

（不定期）

③倫理的配慮

社会福祉士会の倫理綱領に基づき個人情報に配慮することを確認したうえで研究を開始した。個人情報の取り扱いについては、活動の開始時に必ず参加者へ口頭で説明したうえで行った。また、「畑だより」の記事について当事者はもとより、町内会役員の確認の上で発行した。

#### 3) 調査対象地の概要

津山市は、中国地方の東部、岡山県の北部に位置する市で。岡山県では第三の規模の都市である。面積507km<sup>2</sup>、人口103,746人、40,303世帯、高齢化率28.6%（平成27年度国勢調査）である。

北園町は市街地の北部に位置し、住宅が主で商業施設や大学を含む教育施設が混在する地域である。面積507km<sup>2</sup>、人口1,298人、604世帯、高齢化率24.0%（平成27年度国勢調査）である。世帯数の推移は、平成10年より緩やかに減少し、近年はほぼ横ばい状態である。町内会は14の班に分かれ、津山市でも有数の規模の大きな町内会である。平成30年2月現在で314世帯が加入し、加入率は59.9%となっている。

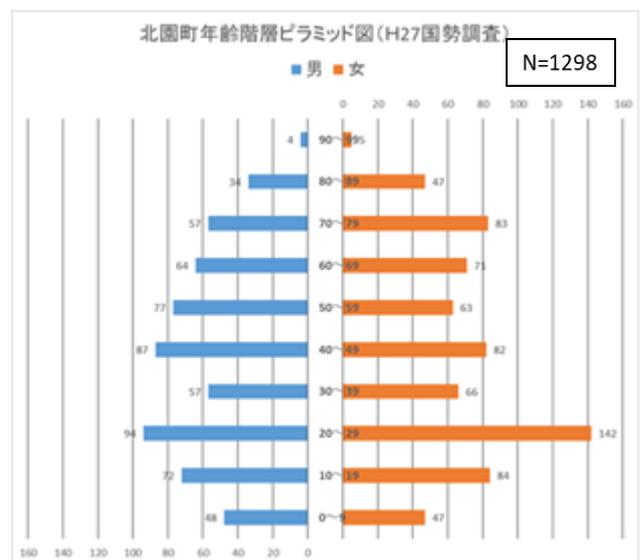


図1 北園町年齢階層ピラミッド図（平成27年国勢調査）

## 4. 調査結果

### 1) アンケート調査より

#### ①調査対象者について

回答者は女性が多く、男性は就労しているためか少なかった。60代の女性が14.7%（37人）と最も多く、次いで80代の女性が11.9%、20代の女性が10.0%、40代の女性が8.5%であった。男性で最も多かったのは、60代で8.1%（22人）であった。中でも20代の女性が多かったのは、学生が多かったためと思われる。

回答者の年齢別人口構成は、北園町の現状を反映しているとは言い難い。しかし、調査が全数調査であり、世帯を対象としていること、調査時間が昼間であることを考慮すると仕方のないところもあると思われる。逆に高齢者の回答者は、70代を別として、男性女性に関わらずかなりの割合の方が回答している。

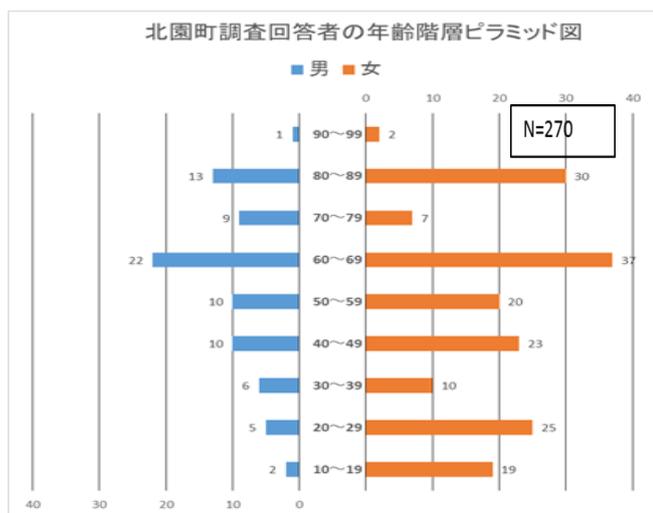


図2 調査回答者の年齢階層ピラミッド図

世帯構成については、「単身者」が31.5%で最も多く、ついで「親子(2世代)」が27.8%、「夫婦のみ」が25.2%、「親子(3世代)」が7.4%となっている。北園町の特徴として、学生を含めた単身者、親子(2世代)の家族が多いことがあげられる。

回答者の職業については、「家事」が21.9%で最も多く、ついで「会社員」が19.3%、「その他」が16.3%、「学生」が14.1%となっている。

#### ② 町内会への加入状況

「加入している」が181人(67.0%)で最も多く、ついで「以前から加入していない」が72人(27.7%)となっている。

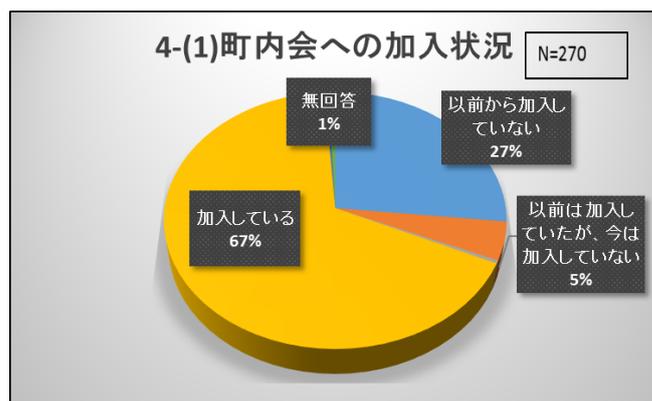


図3 町内会への加入の有無

#### ③今後の町会が担う役割について

「役割を担うことが増えてくるが、引き受け手がいない」が42.6%で一番多く、「あまり変わらないと思う」29.8%、「わからない」が25.6%、「今後減っていく」22.5%。「ますます大きくなると思う」は、5.0%のみである。

#### ④様々な地域のまちづくり活動への参加・協力(複数回答)

「日常的に参加することはできないが、地域のまちづくり活動には協力したい」が67人(24.8%)と最も多く、ついで「わからない」が48人(17.8%)、「年齢や体力面によって参加したいができない」が47人(17.4%)、「すでに参加しているし、これからも参加したい」が42人(15.6%)となっている。

#### ⑤町会活動をより良くしていくために必要な活動(複数回答)

「誰もが参加しやすいように町会活動を企画・運営すること」が60.1%と最も多く、ついで「情報伝達・情報共有を充実すること」が51.7%、「役員の負担を減らす」が48.3%となっている。

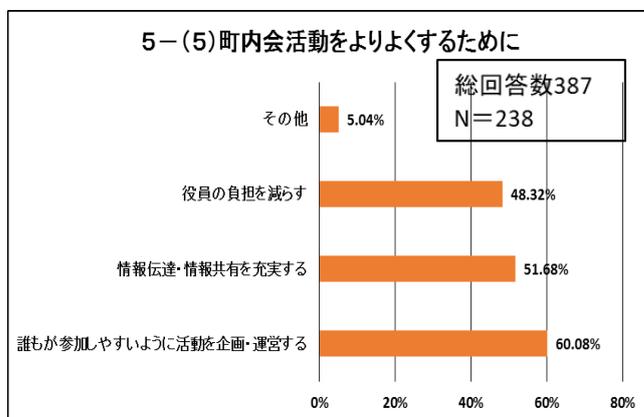


図4 町内会活動をよりよくするために

#### ⑥町内会の活動を活発にするために必要な取り組み(複数回答)

「誰もが参加しやすいような環境を作ることが必要である」が69.5%と最も多く、ついで「まちづくりに役立つ行政情報の

公開や提供」が34.7%、「まちづくりのリーダー、担い手を養成する」が33.1%、「地域が必要とする活動に対して行政が柔軟に対応する」が30.1%、「各種団体と連携・協力していく」が26.4%、「地域社会の課題などを広く議論する場を設ける」が18.4%となっている。

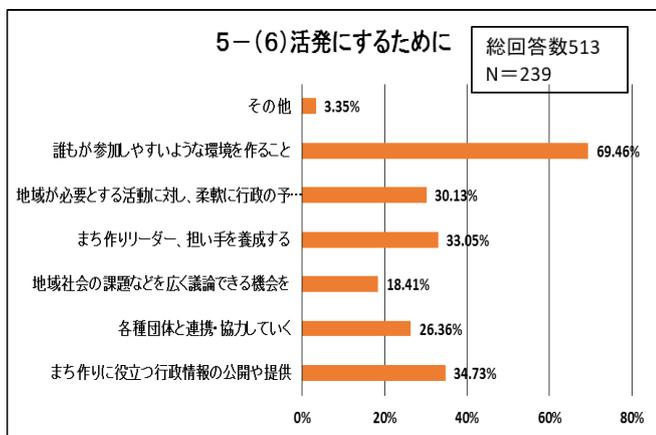


図5 町内会活動を活発にするために

⑦自由記述

「高齢化について」

少子高齢化の進行、社会構造の変化から住民の価値観やライフスタイルも多様化している。町内会の加入者の減少（特に借家の方の未加入）、核家族化が進み、1人暮らしの高齢者の増加などから、つながりの希薄化が進み、助け合い、支え合いが失われることが懸念される。地域における顔のわかる関係や絆づくりを行うことが必要。

「子どもについて」

子どもが少なくなっているのに、子供会は必要なのか。共働きが増え、仕事があって参加できない。現状を考え町内会が必要か。町内会の役割がよくわからない。

表1 町内会の団体と行事の実施状況

各種団体	団体名	発足	現在	
		人数	実施状況	実施回数
各種団体	子ども会	S49	継続実施	
	婦人会	S48	実施中	H12
	福寿会(老人会)	S48	継続実施	
	スポーツ少年団	S52	実施中	S62
	青壮年部	S54	継続実施	
行事	運動会	S46	実施中	H22
	納涼大会	S54	実施中	H25
	三世代交流会	H5	実施中	H25

「役員の負担について」

同じ班が高齢者ばかりで、役員を毎年何かしらしなくてはならず仕事をしている身では大変であり、集合住宅の人はほとん

ど町内会に加入していない。集合住宅で子ども会が今年で終わるため、退会しようと思っている。

北園町も以前は、春の運動会、夏の納涼祭、秋祭り、三世代交流など地域の人が集うイベントが多くあった。それが、お世話をする人の負担や参加する人の減少で行事が行われなくなった。

「活動の活性化について」

防災などを思うととりあえず今は役割を減らして、入れれば役が回ってくるという町内会ではなく、住んでいれば市の情報などの配布物はもらえて、また、年二回の町内清掃くらいは町内会に入っていない方も参加していただいているご家庭でも出られれば複数名参加していただければ住んでいる方がわかるし、伝達事項なども伝わるのでよいかと思うことがあります。

1人にすごく負担が集中したり、やらされている思いながらではなく、自由に活動ができるようにするべき。毎年毎年、役員やリーダーが変わるのではなく（義務でやるのではなく）、リーダーや担い手を養成することが大切。若い世代に参加してもらいたいというのが、実は若い人や外から入ってきた人が前に立つのを嫌う傾向にある人も多い地域だとも思う。

「つながりについて」

・集合住宅に住んでいるので、同じマンションの人とも関わることがないので孤独死の危険は感じている。隣の部屋も空室なので町内会の機能は、今後自分も含めて地域のつながりとして重要になってくるのではないかと思います。

・個々人で感じていることがある場合でも、意思を表明して共有し、課題解決に向かえていないのが現状で、地域で暮らしている人と新しく地域で暮らす人がうまく関われば良いと思う。

「情報について」

・現在の30代が中心になるころには、会合・回覧板もグループウェア等に変わりいい方向に変化すると思う。

・町内活動はあると聞いたことがあるが、本当にやっているのかわからない。情報が入ってこない。

2) アクションリサーチについて

今回のアクションリサーチでは、アンケート調査の結果を基に、「誰もが参加しやすいような環境を作ることが必要である」という意見に着目し、町内会活性化の基であるつながりを作る活動に取り組んだ。そのため、誰でもが取り組める農業という活動をテーマとし、以下の留意点を踏まえ、町内会の協力のも

とに水稻と野菜を栽培した。

#### 【留意点】

- ・いつでもかかわれる
- ・誰でもかかわれる
- ・継続した活動
- ・目に見える
- ・味わえる
- ・触れる
- ・親子で参加できる
- ・学生が活動の準備や進行を行う
- ・町内に活動の広報を行う

#### ①計画の立案

町内会の役員と会議を持ち、学生の作成した活動計画を基に検討を行い、町内会からの要望も含めて活動計画を決定した。具体的な活動として、町内会行事の補助と独自の住民交流企画「みんなの畑」、「みんなの田んぼ」を行うこととなる。また、活動の広報手段として「畑だより」の発行を計画した。

#### ②みんなの畑

町内会の管理する河川公園の一部を畑として開墾した。カヤなどの草刈りから始めなくてはならず、町内の方たちに「何を馬鹿なことをやっているのだ」とみられてきたと感じる。しかし、畑として形が整い、野菜が実り始めると、近づいてきて「こんなもので実がなるか」と野菜の作り方を丁寧に指導してくれた。また、町内の散歩コースでもあり、たくさんの人の目を楽しませた。すぐ横に子どもたちの親水広場もあり、暑い季節水に触れるとともに野菜の収穫を楽しむ親子も多くいた。

夏の収穫祭はコロナの感染者があったため中止としたが、収穫した野菜と夏野菜カレーを参加予定者宅へ配達し、視覚と味覚で楽しんだ。秋の収穫・焼き芋大会には町内の垣根を越えて30名以上の親子が集まり、芋ほり体験、カヤによる焼き芋を楽しんだ。

栽培作物：サツマイモ トウモロコシ トマト ミニトマト  
ゴーヤ キュウリ カボチャ モロヘイア サトイモ オクラ  
ナス

栽培花卉：マリーゴールド コリウス メランポジューム

#### ②みんなの田んぼ

6月、水稻作りは農機具の練習から始めた。周りはビルや住宅が立ち並ぶ中の畑を町内会の仲介で借用し、学生と町内会役

員で畑の土を人力でならして7aの畑を水田に変えていった。

「何をやっているのだ」という住民の問いに、学生が「米を作ります」と答えると、皆一様に驚いていた。6月、町内の親子に呼びかけ田植えを行った。学校で田植えを経験した子どもたちもおり、比較的スムーズに植えることができた。

9月には学生と親子で鋸刃の鎌を使って手刈りし、ヒモで縛ってハゼかけを行った。田植えと異なり未経験の作業が多く、かなりの手間がかかり、大人（親）のかかわりが大きかった。一週間天日で乾燥した後、同様のメンバーで脱穀し、ワラでワラぐるを作った。親子や学生にとっては見たこともない不思議な体験であった。近辺の農家ではすでに作ることはない昭和の時代の農村の風物詩である。

取れたお米（240キロ）は、11月の交流行事「芋煮会」でおにぎりに、またもち米は年末の町内会の「餅つき」に使用する予定である。

#### ③畑だより

7月、活動を町内の住人に知ってもらうことを目的として、A4裏表の広報紙を作成し全戸に配布した。それ以降声掛けの件数も増え、活動に対する理解も広がっている。

#### ④参加者への聞き取り

「親子」

- ・みんなでワイワイでき、また一つ楽しい思い出が出来ました。稲刈りや脱穀、貴重な機会をありがとうございます。
- ・楽しい収穫体験が出来ました。夏野菜カレーと新鮮な野菜をありがとうございます。無農薬の野菜がなかなか手に入らないのでうれしいです。
- ・ナスが苦手な子がいたのですが、あそこの畑でお兄さんたちが作ってくれたやつだよと話すと、おいしい！と全部食べてくれたので私も嬉しかったです。
- ・出来合いのものやスーパーで購入したものでなく、収穫したものを食するのは格別の味がしますね。
- ・みんなの畑を使わせてほしい。お母さんと子どもで野菜を作りたい。

「町内会役員」

- ・田植えや野菜作りを通して住民と交流する事業展開は学生にとっても、町にとってもメリットがあります。
- ・学生さんに、田んぼの代かき（土の移動）を手伝ってもらい助かった。手伝ってくれ、進行してくれるのはとてもありがたい。

- ・学生さんや親子が楽しそうに田植えをする光景は感動ものです。
- ・社会人になってからはこのような機会はなかなか難しいので学生という身分の時に、出来るだけ多くの体験を学生さんたちにしてほしいです。
- ・農家の方や大学生、親子が協力して作業に取り組むこの農作業(イベント?)は、大変意義のある取り組みと感じました。もみ殻の飛ぶ中ではありますが、笑顔で作業をしている姿を見ると、まるで皆さんが楽しんでいるように見えました。また、子どもさんにとっては農業体験を通して、「食の見える化」が一層明確になったのではないのでしょうか。

#### 「住民」

- ・良いことであり、散歩の途中で何が出来とるのか楽しみで見ている。
- ・ワラごろが懐かしい。昔を思い出す。
- ・広報紙を見て活動を知った。自分は高齢者になって参加できないが頑張ってください。
- ・学生さんたちが、住民に対していろいろとしてくださる。とてもうれしい。

#### 「学生」

- ・これまで関わる事がなかった町内の方と関わってうれしい。
- ・子どもたちが名前を憶えてくれたのが嬉しかった。
- ・初めて野菜作りや田植えをして楽しかった。また初めて町内の方と話をした。
- ・活動と活動の間が短く、人やもの等の調整が難しかった。特に毎日の水やりが大変だった。
- ・人数が少ないと毎年続けていくのが大変。関わる学生の人数をもっと多くしてほしい。

### 5.考察

#### ①他市の町内会に関する調査結果と比較して

調査対象者として、単独町内会の住民に対して全数調査を行ったものはなく、全市民(母集団)から抽出された市民(標本)や町内会長の集団に調査を行ったものがほとんどである。また、他と比べて対象者に若者の割合や単独世帯が多く、大学の学生が多いことが特徴である。

他の調査に比べて、結果が異なっている項目についてみていく。まず町内会の加入率であるが、67%と低めである。学生や独身のサラリーマンが加入をためらっていると考えられる。未加入者への質問では、半数近くが加入しない理由を「いずれ

引越すため」としている。

多くの市で課題とされていた「活動の満足度」は、51.1%の人が「まあ満足している」と答えている。これは町内会長をはじめ役員によるものであろう。会長や役員が陣頭に立ち活動を行うことが多く、住民も納得しやすいと思われる。しかし、役員の負担は傍目にも感じ取られており、「町内会の活動をよりよくするために」という質問に48.3%が「役員の負担を減らす」と回答している。同様のレベルで活動を続けていくことは、特定の役員への負担が蓄積していくことにつながり、システムとしての町内会の運営では避けなくてはならない状態である。

町内会の活動について課題解決の方法を聞いているものが多いが、「誰もが参加しやすい活動を企画・運営すること」を選択肢として聞いているものはあまりない。本調査では60.1%がこの選択肢を選んだ。(複数回答)他市では、担い手不足 役員の煩雑さ 情報の共有を課題とし、課題解決の提案で「業務の仕分け」、「活動の見える化」、「他町内会や団体との連携」、「広域化」、「活動への理解の促進」等があげられていた。自由記述欄にも書かれていたが、町内会活動へ参加したい気持ちは持っているのだけど、毎回参加できない、年を取ってしまった、仕事がある、役員は大変そうなどの思いを勘案して集約していると思われる。

中田や紙屋は、町内会の住民が活動に参加することによってつながりを強めることができ、活性化の基盤につながると言っている<sup>[21][22]</sup>。しかし、現状の町内会の活動では定期的な行事の開催、早朝のゴミ当番、行政からの委託事務等があり参加しなくても参加できないというのが、多くの住民の本音であろう。すべての調査で半数以上の住民が町内会の活動に関心があると言っている。しかし、毎回いつも、最初から最後まで参加するのでは負担があまりにも大きい。特に高齢者や仕事を持っている人はそうではないか。

参加したい人だけが可能な時間に参加し、町内会に加入していない人も参加できる。準備や運営もやりたい人が行う。場所や設備の提供、資金補助を町内会が行い、NPO やボランティアと町内会が共に行う活動が、約6割の住民に望まれていると考えられる。

ではどのような活動があるのであろうか。その提案を次節で述べる。

#### ②滑り台型の活動支援

滑り台型の活動支援とは、町内会が活動の枠組み（滑り台）を用意し、やりたい人に滑って（活動の準備や運営・参加）もろう仕組みである。

滑り台は設置しておけば、点検は必要であるが誰でも楽しめる。別に技術も、お金もかからず、重力によって滑ることが楽しい。楽しければ戻ってくる。1回だけ、何回も滑る子も、毎日来る子、日曜日だけ来る子も。危ないからと見守る大人も集まる。この同じような感覚を共有した子どもたちには、つながりが生まれ、滑る順番や一度にたくさん滑らないなどのルールが自然発生していく。町内会も元は自然発生的なものである。

誰もが参加でき、自らやってみたくと思える。参加の度合いも様々で自由。準備をするものやりたい人がやる。場所や設備もなるべく公共のところを利用する。まずは活動に参加して、このつながりを太くしていくことが大切ではないか。地域のコミュニティーを活性化させる基盤である。

そうすることによって、町内会が担っている様々な活動もスムーズに動き出す。役員の負担感も軽減するのではないかな？

但し町内会の活動の整理も必要である。紙屋の指摘のように、町内会は行政の末端組織ではなくあくまでも任意団体に過ぎないからである。行政の下請けなどの負担となる活動を減らし、町内会の基本的活動を精査していくことが必要である<sup>[21]</sup>。

そうすることによってこれまでの自治体の調査や先行研究で指摘された「役員負担」「活動の適正化」「人材不足」「加入率の低下」等が解消されていくのではないかと考える。もちろん基本的な活動は残るのであるが、それを精査し、新しい枠組みに導くリーダーシップが必要とされている。

滑り台型の活動を重ねることによって、やってみようと思える人が出てくるのではないかな？現状の町内会を正面から改革することは難しい。大ナタを振るうよりも楽しい活動、負担のない活動から始めることが第一歩になる。

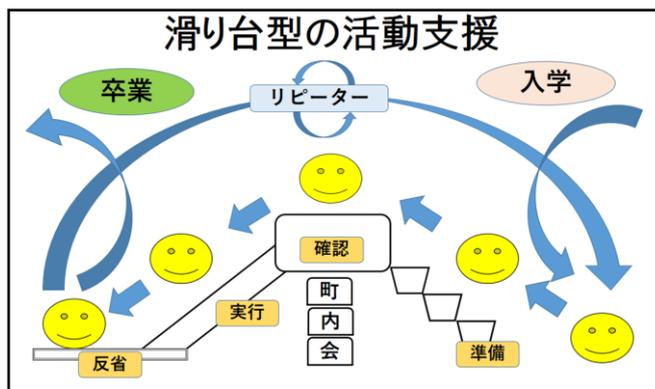


図6 滑り台型の活動支援（概念図）

以下に滑り台の設計図を挙げる。

### 滑り台の設計図

【設置】（広報・設定）みんなが見えるところに設置

参加しやすさ 見える化 安全性

【階段】（準備段階）**集合** 一つずつ一段ずつ進めていく

着実に 目標を決め

※途中で引き返すことも可能

【踊り場】（確認）内容の確認 参加者の確認 順番の確認

※階段を走って登りここから参加することも可能

【滑り板】（実施）活動の実施 楽しさを重視

長さや（期間）や高さ（難易度）を調整

【砂場】（反省・終了）安全に終了 行事に区切りをつける

反省の場 **解散**

【メンテナンス】（修理）安全の確認 仕組みのメンテナンス

保険

【管理者】 町内会

### 滑り台の利用プロセス

- ①入学してきた学生は、地域に興味を持ち、滑り台のそばまでやってくる。
- ②全体を把握したうえで、階段に足をかけ、準備を一段一段やっていく。引き返したり一段飛びで進むことも可能。
- ③踊り場に集まって内容や参加者の確認を行う。
- ④期間や難易度を調整しながら滑り板を滑る。楽しみながら活動を行うことが重要。
- ⑤滑った後は安全な砂場に着地。反省を行って解散する。
- ⑥4年生はそのまま卒業する。興味がある学生はリピーターとして再び滑り台へやってくる。

滑り台型活動支援を回していくためには、学生に代表される「よそ者・ばか者・若者」が役に立つ。清水らによる学生へのアンケート調査によると、町内会への関心は高いが、実際に活動内容を知り参加しているものは少ない。また、逆に住民も学生が町内会活動に参加することを望んでいるが、働きかけはしていない。出会うきっかけを作ることが求められている<sup>[23]</sup>。

彼らは、町内に居住しており、比較的自由に動くことが出来る。4年たつと卒業してしまうが、次々と新入生が入ってくる。新陳代謝が盛んであり、意欲もあり、経年の負担感も少ない。これを利用しない手はない。

そしてまた、地域支援には「足し算の支援」<sup>3)</sup>と「掛け算の

支援」<sup>4)</sup>があると言われている。地域力がマイナスの状況では、掛け算的に支援をしても地域の状況はマイナスにしかならない。まずは住民の不安や悩みによりそい、共に行動をするような人材を送り込み、足し算的に支援し、地域力をプラスに戻した上で、掛け算的な支援を行えば地域力はより高まるという理論である<sup>[24]</sup>。

足し算の支援には、ポイントが三つあり、一つは外の人の関与、二つ目は成功体験を重ねること、三つ目はその体験をある程度の数の住民が共有して共通認識にすることである。これは滑り台型の支援と一致する。

何度でも滑ることが出来る滑り台を用意することで、地域の力は少しずつ高まっていく。また、それを担う人材として学生は最適であると言える。

### ③滑り台型の活動支援の実践（アクションリサーチでの活動）

結果で説明したように、滑り台型の活動支援「いつでも、だれでも参加しやすい活動」として農業をテーマに「みんなの畑」、「みんなの田んぼ」を実施してみた。町内会のかかわりとしては、最初の基本的な計画の策定までで、役員でやりたい方と学生で活動の運営を行った。役員も常時参加するわけではなく、学生も全員がそろわなければならない。田植えから脱穀、種まきから収穫まで、常時世話が必要であるが、参加できる人で対応していった。

そして、田植えや、収穫など節目の行事に町内会の親子を招待した。自由参加ではあったが多くの親子が参加した。父親の参加もあり効果の一端を実感することができた。農業は参加度の幅が大きく、年齢や能力に合わせて参加することができる。ただ参加するだけでなく、作業の一端を体験でき、親子とも達成感を味わうことができる。見る、触れる、臭う、聴く、味わう、まさに5感に訴える活動である。

参加者等への聞き取りでは、おおむね好意的な意見が多く、目標としていた「だれでも・いつでも参加できる活動」を実践できたのではないかと感じている。今回はコロナの影響があり、限られた範囲の人に呼び掛けたのだが、それでもたくさんの方が参加してくれた。行事の当日だけではなく、時間が空いた時に畑や田んぼを訪ねてくれる人もいた。

しかし、聞き取りでは「楽しい」という感想をたくさん聞いたが、運営を担った学生の意見では、「少ない人数で準備や運営するのは大変」、「毎日の水やりは大変」等の困難さが述べられていた。今回は試行でありゼミ生8名での対応が多かった。メ

ンバーで負担を分け合ったが、基となる数が少なかったためと思われる。参加者や行事の軽重に合わせて、滑る人の数を定以上にすることがポイントである。

滑り台のように畑や田は常時そこに存在する。水やりをしたり、草抜きをしたり、収穫をしたりと活動に切れ目はない。できるときに親子で水やりをし、収穫をしてその場でトマトを食べてみる。散歩がてら畑や田んぼを見て、学生に注文を付ける。子どもから高齢者まで、様々な住民の人ができるときに自分のかかわりを持つことができた。

同じものにかかわりを持つことで、それぞれにつながりができてくる。人と人との関係ができることが、町内会活動の根本であり最大の目的である。誰でも、誰にも挨拶ができる町内会を目指していきたい。

## 6 まとめ

全数調査を行い、北園町の町内会活動の現状や課題が全国の市町村のそれと差異があることを明らかにした。現在、多くの町内会は、加入率が下がり、高齢化や担い手不足などの影響で活発な活動ができにくくなっている。この状況を改善するためにアクションリサーチを行い、町内会と協力しながら解決方法を検討し、試行した。その結果、「滑り台型の支援」を提案することができた。

最近、大学周辺で挨拶をしてくれる大人と子どもが増えたと感じている。大きな変化ではないがこれが一番の成果と感じている。先日、主婦の方が子どもを連れ、鍬を握り、みんなの畑を耕している姿を見た。まだ小さなお子さんがシートの上で遊ぶ傍ら、慣れない手つきで畑を打つお母さん。農業をしたことがない方であろう。「ご自由に」ということで地域にアナウンスをしておいたが、その成果が出ていると感じられた。

## 註

- 1) 地域での問題解決を目的とし、研究者が積極的に関与して調査を行い、その結果を基に地域住民とともに問題を解決していくもの。実践的研究といわれる。ドイツの心理学者レビンが提唱。
- 2) 地域運営組織とは、地域の生活や暮らしを守るため、地域の人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取り組みを持続的に実践する組織。町内会

と異なり個人単位で自由参加である。総務省「平成 30 年度地域運営組織の形成及び維持的な運営に関する調査研究事業報告書」

3)「足し算の支援」とは、外部とのつながりを作り、小さな成功体験を重ねたり、その成果を住民全員で共有するような支援のことで、具体的には以下のような活動を指す。

(地域の宝探し、マップづくり、ふるさと自慢料理づくり、ふるさと便りづくりなど) 稲垣文彦が提唱。

4)「掛け算の支援」とは、住民が描いた夢を現実にする専門的な支援のことで、具体的には以下のような活動を指す。(定住促進、起業、外部の企業団体との連携など)

#### 引用・参考文献

[1] 京都新聞 (2020)「国勢調査は町内会の仕事か?調査員の確保丸投げ過ぎる」『京都新聞デジタル版』2018年9月11日

[2] 中田実 (2015)「町内会・自治会の特質と現代的課題」『住民と自治』2016年1月号,自治体問題研究所

[3] 内閣府 (1968)「住民自治組織に関する世論調査」内閣府

[4] 内閣府 (2010)「国民生活選好度調査」内閣府

[5] 中田実 (2019)「地方分権時代の町内会・自治会」自治体研究社

[6] 前掲書

[7] 清水陽子・中山徹 (2009)「単身で生活する大学生と町内会を単位とする地域コミュニティとの関係:奈良市中心市街の場合」『日本家政学会誌』60,日本家政学会,p.499

[8] 竹本康彦 (2017)「町内会・自治会加入状況改善のための活動の見える化と仕組みづくりに関する一考察」『県立広島大学経営情報学部論集』第10号,広島県立大学,p.115

[9] 岡山市市民協働局市民協働企画総務課 (2016)「岡山市町内会長等アンケート調査」岡山市

[10] 宇治市地域コミュニティ推進検討委員会 (1968)「町内会・自治会の活性化の方策および地域コミュニティ・協働のあり方に関する提言(案)」宇治市

[11] 都留市 (2019)「自治会活動に関するアンケート」都留市

[12] 横浜市民局 (2016)「横浜市自治会町内会・地区連合町内会アンケート調査報告書」横浜市

[13] 鎌倉市民活動部地域のつながり推進課地域のつな

がり推進担当 (2016)「自治・町内会調査アンケート報告書」鎌倉市

[14] 京都市 (2018)「自治会・町内会アンケート報告書」京都市

[15] 弘前市 (2016)「町会活動に関する調査報告書」弘前市

[16] 西宮市民局コミュニティ推進部地域活動支援課 (2016)「自治会等に関する市民アンケート調査報告書」西宮市

[17] 函館市民局 (2019)「函館市町会アンケート結果報告書」函館市

[18] 八尾市 (2012)「町会活動に関するアンケート調査報告書」八尾市

[19] 地域の絆・自治会あり方研究会 (2017)「自治会活性化と加入促進に向けた提言」東村山市

[20] 地域コミュニティ活性化検討会 (1968)「地域コミュニティに関するアンケート調査結果報告書」津島市

[21] 前掲書

[22] 紙屋高雪 (2017)『どこまでやるか、町内会』ポプラ新書

[23] 前掲書

[24] 稲垣文彦 (2013)「中越地震からコミュニティ再生」復興第4回コミュニティ研究会